

それからの
武蔵

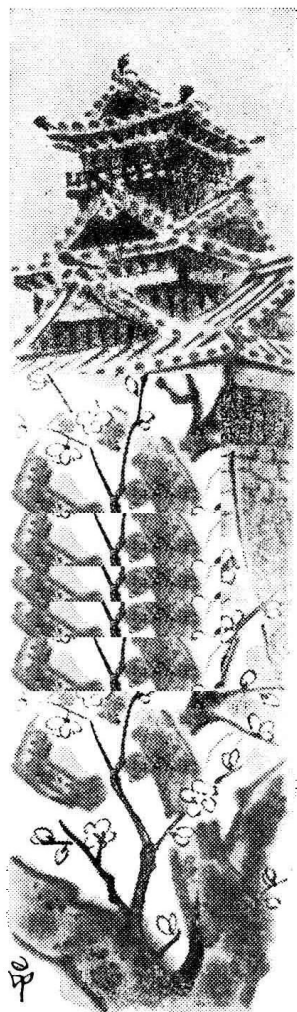
第五卷

それから の武蔵

第五卷
本篇

小山
勝清

東都書房





© K. Koyama 1964

それからの武蔵 第五卷 熊本篇

著 者 小 山 勝 清
発 行 者 斎 藤 修 一 郎
印 刷 所 一 弘 社

昭和三十九年六月二十五日発行
昭和四十年九月二十五日第六刷

東京都文京区音羽町三ノ一九

発行所 東 都 書 房

電話・東京(九四二)一一一一
振替口座・東京七二七三二

定価 二 六 〇 円

(製本・大進堂)

乱丁・落丁の際はおとりかえいたします。

熊本篇

目次

相 あい	女 にょ	お	武	流	青 せい	浄 じょう	清 せい
寄 よ		花	蔵	れ		不 ふ	
る		畑	来	る		浄 じょう	掃 そう
もの	人 にん		る	雲	嵐 らん		

三	九	九	六	五	七	三	七
---	---	---	---	---	---	---	---

風 ふう	五 ご	新	巨 きょ	敗	鳴 めい	士
流 りゅう	月 つき		星 せい			
往 おう	晴 は		落 お			
来 らい	れ	風	つ	北	動 どう	道

三

三〇三

一八

一七

一五

一四

一三

装幀
カット

川合喜二郎
野口昂明

それから
の武蔵

第五卷
熊本篇

清^{せい}

掃^そ



武蔵は、ついに仕官の決心をした。この知らせを伊織からうけとった新太郎は、さっそく佐渡に報告すると共に、五人組の同志を自宅によんで喜びの祝盃をあげた。

宴なかばに、ふと山東弥七が眉根をくもらせ、

「どうも、おれには目ざわりだ。主水めがのさばっていることが、先生を迎える座敷の片すみに不浄が残っているようで、氣持が悪い」と、いいだした。

「うん」

みんなも、強くうなずいた。武蔵に絶対の敬愛をよせ、彼の肥後入りを座を掃き清めて待つといった氣持の五人にとって、主水はたしかに一点の不浄的存在だった。

野田助右衛門が、肩をいからせていった。

「あいつ、うまく立ちまわって、かなりの地盤をきずきおった。というのも、きつと先生へ拮抗しようとする底意からだ。堂々たる兵法の争いだったら、

それもよい。だが、あいつのは、刀のかわりに、どぶの水をひっかけるような汚い争いだ。あいつ、きつと先生をそんな手で、傷つけようとするにちがいないのだ」

「そうだ。今のうちに斬ってすてるか！」

宮脇四郎太と和田平作が、眉をあげていった。

新太郎も同じ氣持ではあるが、

「待て！ 殿が、じきじきお抱えになった主水、いわれもなく斬ってすてるわけにも参らぬ。しかし、いつかはきつと地金を出す。野田がいうように、あいつが神妙にして勢力を養っているのは、先生に拮抗し、由利姫を手に入れんがためだ。けっして、心から殿に奉公しているのではない。今に見ろ、きつと性根を暴露するから……。これからも監視を怠らず、機を見てやつつけるのだ」

と、たしなめた。最もよく、主水の正体を知っている新太郎の言葉に、

「うむ、まあ、そうするほかはあるまい」

と、みんなは腹の虫をおさめ、こんどは由利姫の話になった。まず野田が、

「姫は、まことに賢い。あれだけ子供らをいつくし

みながらも、けっして、その愛におぼれぬ。子供らをつぎつぎに養子養女につかわし、奉公にも出すとは敬服の至りだ」

と、口をきった。

「そうだ。わしにも相談があつて、あゝした方法をとられたのだが、けっして子供らを荷^{にあづか}介^{かい}にしての処置^{しよ}ではない。子供らの将来を思い、生業^{せいぎよく}につかせる^とすれば、いつまでも白梅庵^{はくばいあん}におくわけにはいかぬ。白梅庵は、いわば温室^{おんしつ}だからな」

新太郎が、いいそえた。

姫は、いま新太郎がいったとおりの趣意^{しゆい}をもつて、子供らをつぎつぎと手放しつゝあつたのである。

「ところで、寺尾！」

いつも気の早い山東が、膝^{ひざ}をのりだして口を開いた。

「先生がこられたら、身辺^{しんぺん}の世話^{せわ}は誰がする？」

二

新太郎は、答えた。

「さあ、それが問題だて……伊織^{いおり}殿も、そのことを気にしておられる文面^{ぶんめん}だった。先生自身は、若い気でおられるかも知れぬが、病後、しかも五十七歳だからなあ」

「姫に、世話を願えないだろうか？」

和田がいい出した。これも、五人が五人とも前々から内心考えていたことだった。いや、話にも出た問題である。しかし、だれにも、それを実現させる自信はない。

「そうなれば、申し分はないが？」

新太郎は、そうしたくてたまらぬという面^{おも}もち。

山東が口をだした。

「どうだ寺尾、佐渡^{さど}様に、とりもちをお願いしたら？」

すると、和田が、

「それなら、いっそ、お上^{かみ}へお願いしよう。五月か六月には御帰国^{ごこく}になる」

「そうだなあ、佐渡様に相談して、殿へ表向^{おもむ}きのなかだちをお願いすることにしよう。万全^{ばんぜん}の策^{さく}というわけだ」

と、新太郎が断^{ことわ}をくだした。

「うむ、それはいい」

みんなは、この案に賛成した。

翌日五人は、そろって佐渡を私邸に訪ねた。

「殿！ 御相談があつて参りました。武蔵先生を迎えるにつきまして、日常身辺の世話をいたす人物がなくてはならぬと存じまして」

新太郎が、口火をきつた。

「なるほどのう」

佐渡もすぐ話にのつて、

「誰か、心あたりがあるのか？」

新太郎が、つゞける。

「由利姫にお願いしたら、どんなものでございましょう。だんだん子供らも、かたづけつゝある現状でございますから」

「うむ」

佐渡は目をつぶって、

「わしは、目と鼻の間にありながら、まだ、会つたことはない。しかし、立派な人物であることは、噂をきいてもわかる」

「はい、まことにすぐれた女性でございます。それに、伊織殿の実姉と、うけたまわっております」

「しかし新太郎、こればかりは、双方の心もちしいじゃぞ」

「そのことでござります」

新太郎は、こういつて同僚の顔を見まわした。

「先生も、姫も、たがいに、なみなみならぬ厚意と尊敬をはらっておられることは、たしかでございませう。たゞ先生は、前々から妻帯の気がみじんもなく、姫とて同じ心のようにでございます」

「うむ、まてよ」

佐渡は首をかしげて考えこんだが、やがて自信ありげに、

「厚意と尊敬があるとすれば、すでに下地はできているというものだ。うまくもつていけば、できぬことでもなさそうだ」

こういつて、また考えこんだ。が、やがて、

「そうじゃ、お上に、とりもちをお願いしよう」

三

一方、松山主水は、期待した武蔵の病気が回復したことを、

「ふん、運のよい男だ」

と苦々しく思ったが、彼自身の家中の人氣はいよいよあがり、

「もはや、武蔵何ものぞ」

と、自信をつよめた。隠忍自重して、自身は由利姫を訪ねはしなかったが、時折り、さりとした口上をそえて、庵の子供たちに贈りものなどをした。

——すぎこし方を見返れば、今さらのごとく、おのれの醜怪に嘔吐の思いをいたしております。姫の崇高なる精神に、ようやく心魂清澄、御奉公一途につとめおります。

と、書きそえたこともあった。

この時は、姫からも返書がきた。

——そこ許さまの評判、よろしきを聞くにつれ、心うれしく、この上の御発奮をお祈り申し上げます。

という意味のことが書いてあった。

これを読んで、主水が天にもほる心地になったことは、むろんである。たゞ問題は、いつ、いかにして、姫に結婚を申しこむかということである。

ところが正月になって、主水の耳にも、武蔵がい

よいよ仕官を決心し、忠利侯御帰国をまつて、正式のとりきめが行われるという噂がはいった。

「もし、これが真実とすれば、うかうかしておられぬぞ」

予期したことはあるが、主水は急にあわてだした。

「なに、今さら武蔵が肥後にきても、おれの地位がゆらぐことはない」

こうした地位に対するうぬぼれはあったが、由利姫については、まったく自信がなかった。

「どうしよう？」

主水は、ついに一案を考えだした。

「そうだ！ 殿に一切を申しあげて、姫との結婚をお願いしよう」

主水は、こう、一大決心をしたのである。

姫も殿の言葉であつたら、こぼむことはできぬだろう。たとえ武蔵に御下問があつても、武蔵は反対を唱えぬだろう。慕うているのは、武蔵でなくて姫である。武蔵は、恋愛を否定しているきびしい独身主義者である。姫の恋情をうけつけるはずがない。又、姫もいかに慕いよつても、武蔵と結婚できると

は思つていまい。

「そこが、つけ目だ。断じてやるぞ」

主水は、考えるほどに勇みたち、自信をつけていった。

しかし姫に対しては、こうしたことはおくびにも出さず、相変らずとりすました態度で、贈りものをするにとどめた。

春も過ぎて六月、忠利は無事帰国した。

主君を迎えて、にわかには活気づいた熊本城。

四

忠利は、肥後に入国当時は城中に居住したが、あとではお花畑に邸館を設けて起居、公の儀式以外の政務は、この館で見るが多かった。

佐渡は、忠利が多忙な政務の処理も一応かたづき、くつろいだ日を見て、お花畑の館に出仕、武蔵のことをきりだした。

「武蔵は昨年は重病に倒れましたが、今はまったく回復。年頭、江戸表へも書面で御報告申し上げましたとおり、お召抱えをお受けする旨、伊織を通じて

知らせてまいりました」

というと、忠利は、

「おう、そのこと、そのこと。寝たまも忘れなかったぞ」

と喜色満面、

「さつそく祿高、格式などを協議、表向きに招請するよう、とりはからえ」と、いいつけた。

「さらば、ここ数日中に重役を集め、お上の御臨席のもとに、とりきめたいと存じます」

「うむ、余がたつての頼みでもあり、將軍家をはじめ他家への面目もある。祿高、格式ともに厚くして迎えたいものじゃ。今となつて老侯への遠慮はいらぬぞ」

「御意」

佐渡は、委細をうなずいてから、

「時にお上！ いずれ、武蔵の屋敷を定めねばならぬと存じます、御承知のとおり武蔵は独り者、身辺の世話をする女性もがなと、思いめぐらすうち、はたと心にうかんだ者がございました」

「なるほどのう……して、その女性とは？」

忠利も、くだけた顔。

「由利姫では、いかゞなものでございましょう」

忠利は、はたと膝をうった。

「うむ、それはよい。身辺の世話というより、いっそ、由利を妻に迎えさせてはどうじゃ」

佐渡は、えたりと、

「実は、わたくしも、さよう思っております。しかし、武蔵は頑固な独身者、姫とてなかなかの女性ゆえ、なまじのことでは？」

「いや佐渡、武蔵と由利は江戸以来のちかづき、由利は伊織の実姉とも聞いている。因縁はきわめて深い。余が、じきじき口説いてみるぞ」

忠利は、自信ありげにこういった。

「なるほど、お上じきじきのお言葉なれば、武蔵も姫も承知いたしました。武蔵とて、これからは浪人ではない。れっきとした格式の武士なれば、今までのように、頑固にひとり身をいいはることはございすまい」

「よしよし、これは余にまかしておけ。余は、武蔵と由利がたがいにくからず思っていることを、とうに見ぬいているのだ。なあに、武蔵とて木石で

はないはず。そちがいうとおり、時が時、きつと承知させてみる。武蔵め、これをいいだしたら、どんな顔をするだろう、うあつ、はっ、はっ」

忠利は、いかにも、楽しげである。

五

こうしたある日のこと、主水は、
「内々にて、お願い申しあげたい儀がございすれば、おそれながら人払いの上にて……」

と、お目通りを、忠利侯へ願ひ出た。

身分からいえば、輕輩の徒、人払いなどという柄ではないので、忠利はその思いあがり、ちよつと不快な顔をしたが、

「通せ！」

と、取次ぎの者にいいつけ、近侍小姓を遠のけた。

「身分もわきまえぬ、たつてのお願い。おしかりもこうむらず、お目通り仰せつけられまして、主水、身に余る光榮に存じ奉ります」

主水は、こういつて平伏した。いつもに似合わ

ぬ、神妙な言葉である。

「苦しゅうない。面をあげい」

「はっ」

「内々の話とは何事であるか、遠慮はいらぬ。まっすぐに申してみよ」

主水は、顔をあげた。

「主水、三十年浪々の身を落ちつけ、御奉公のよこびも初めて相わかり、日々安穩の日をおくること、すべてお上のお情けと、感佩いたしおる次第でございます」

主水としては、最大限の感謝の辞である。忠利も意外な顔、なにをいいたすかと、興深く思つて、

「うむ、余も、そちの奉公をよろこんでいるぞ」

主水は、いよいよ必死の面もちになった。

「しかるに主水、今日まで妻をめとらず、独り身で暮して参りました。浪人の身なれば、これも余儀ない次第でございましたが、今日、身が定まりましては、何かと不自由……」

忠利は、やっとわかつて微笑した。

「おい、そのことであったか。それはいかにも不自由であろう。余に異存はないぞ」

「実は、それにつきまして、お上に、お願い申しあげたい儀がございまして……」

「なに、余に願ひ？ 家中に、気にいった娘でもあるというのか。よしよし、いつでも余がとりもつてかわす。だれの娘かの？」

「はっ、そ、それが……」

「遠慮はいらぬ。いつてみい」

「お上。いかにも、命をかけても所望したい女性がござります」

「ほう、命をかけても？」

「お上。その女性とは、島崎の白梅庵に住居いたす、由利姫にございます」

「なに、由利を？」

忠利の顔は、さつとくもつた。主水は、とびさずつて手をついた。そして必死の声。

「お上、お願いでござります。なにとぞ、お上の御声がかかりをもつて、姫がそれがしの妻となるよう、おとりなし下さりませ。姫を妻に迎えましたる以上は、水火も辞せず御奉公、かならずお情けにむくい奉ります」

忠利は無言で、じつと主水を見つめている。